

平成21年5月31日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820016

研究課題名（和文）啓蒙主義による宗教理解の再考：モーゼス・メンデルスゾーンとユダヤ啓蒙主義の場合

研究課題名（英文）Rethinking the view of religion in Enlightenment - Moses Mendelssohn and the Jewish Enlightenment

研究代表者

後藤 正英 (GOTO MASAhide)

佐賀大学・文化教育学部・講師

研究者番号：60447985

研究成果の概要：本研究では、啓蒙主義思想の現代における有効性を検証するために、18世紀ドイツのユダヤ啓蒙主義の代表者であるモーゼス・メンデルスゾーンの思想に注目した。啓蒙主義の宗教理解は、一般には、反宗教であったと考えられている。しかし、ユダヤ啓蒙主義のうちには、必ずしも宗教と対立しない、宗教に親和的な潮流が存在した。宗教に親和的な啓蒙主義の特徴を、メンデルスゾーンの政教分離論や律法解釈を中心に考察した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	700,000	0	700,000
20年度	720,000	216,000	936,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,420,000	216,000	1,636,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：啓蒙主義、モーゼス・メンデルスゾーン、スピノザ、政教分離、カント、律法、ユダヤ教、ユダヤ学

1. 研究開始当初の背景

私は、モーゼス・メンデルスゾーン研究を博士後期課程3年次から開始し、日本学術振興会の特別研究員（PD）時代を経て、現在まで研究を継続してきた。カントの宗教哲学研究を進める中で、カントの同時代人であるメンデルスゾーンに注目したことが研究の出

発点になった。研究を進める過程で、メンデルスゾーンに関して、ドイツ啓蒙主義の文脈のみならず、ユダヤ教の歴史の中での位置づけを意識するようになった。

2007年4月に佐賀大学に就職した。当時は、私自身の中でユダヤ学関係の知見が徐々に蓄積されてきた段階にあった。哲学とユダヤ学の双方の知見が獲得できたことで、メン

デルスゾーンとユダヤ啓蒙主義について総合的な研究がおこなえる地点に到達しつつあったといえる。

当研究を進捗させるためには、海外の研究機関での調査や現地の研究者との意見交換が不可欠であった。さらに、佐賀大学の図書館はユダヤ学に関する文献が豊富に所蔵されているとはいえない状況にあった。そのため、研究上の必要経費を獲得すべく、科学研究費に応募した。

2. 研究の目的

近年、ヨーロッパでは、EUとアラブ世界の関係やヨーロッパ内部のイスラーム教徒との共生をめぐる、近代ヨーロッパが生み出した宗教理解の妥当性が改めて問い直されている。近代ヨーロッパの宗教理解の枠組みは、啓蒙主義思想によって形成されたものである。宗教をめぐる現代の状況を理解するためには、今一度、啓蒙主義の宗教理解を検証し直す必要がある。本研究では、啓蒙主義思想の現代における有効性と限界の双方を検証するために、18世紀ドイツのユダヤ啓蒙主義の潮流に注目する。この研究では、特に、ユダヤ啓蒙主義の代表的人物であるモーゼス・メンデルスゾーンをその代表者として取り上げた。

特にユダヤ啓蒙主義に注目した理由としては、主に以下の2点を挙げることができる。

1) 宗教に敵対的ではない啓蒙主義としてのユダヤ啓蒙主義

啓蒙主義の宗教理解は、一般には、「反宗教」であり「反伝統」であったと考えられている。しかし、ユダヤ啓蒙主義の潮流の中には、必ずしも宗教や伝統と対立しない、宗教や伝統に親和的な潮流が存在した。私はこの点に注目したい。ここには、宗教や伝統を前近代的な価値として安易に切り捨ててしまうような宗教理解が、近代的な宗教理解の唯一の形態ではなかった可能性を読み取ることができる。

2) ユダヤ教の伝統に根ざした啓蒙主義

ユダヤ啓蒙主義は、キリスト教世界の啓蒙主義とは違うタイプの啓蒙主義の存在を指し示している。つまり、啓蒙主義のもつ意味が、キリスト教とユダヤ教では異なっているのである。より正確な言い方をすれば、キリスト教とユダヤ教とは、たとえば、理性や知性という同じ言葉を使っている、それぞれの宗教的背景のゆえに、その概念理解が異なっているのである。

もちろん、ユダヤ啓蒙主義はキリスト教世界の啓蒙主義から大きな影響を受けている。しかし、ユダヤ啓蒙主義は、自らの宗教的伝統に依拠して、キリスト教世界の啓蒙主義とは異なる展開を示した。言い換えれば、ユダヤ啓蒙主義に始まる近代のユダヤ教は、近代ヨーロッパの内なる他者であった。それゆえにこそ、ユダヤ啓蒙主義とそれに続く近代ユダヤ教の潮流は、近代ヨーロッパの宗教理解を、近代ヨーロッパの内側から再検証するにふさわしい事例であるといえる。

3. 研究の方法

関連学会での研究発表や論文投稿、さらには書籍での発表を活用して、研究を進捗させた。それ以外に特筆すべき点としては、次の三つを挙げることができる。

1) 国内の研究機関や研究者との連携

ユダヤ教研究をおこなっている国内の研究機関との積極的交流を通して、研究を進捗させた。一つ名前を挙げるならば、同志社大学神学部一神教学際研究センターを指摘することができる。私自身は、すでに2006年の時点で、当研究機関が主催するシンポジウムへの参加を通して、当機関のスタッフとの交流を深める機会があった。本研究計画を進捗させてゆくにあたっては、こうした研究交流を積極的に活用した。

国内の研究者の中では、特に、同志社大学の手島勲矢氏と広島大学の長田浩彰氏から専門知識の提供を受けた。両氏には、資料閲覧の際にもお世話になった。

2) 京都ユダヤ思想学会での活動との関係

2009年に京都ユダヤ思想学会が設立した。京都大学と同志社大学の若手研究者を中心として、2009年に京都ユダヤ思想学会が設立した。私も当初から会の設立と運営に深くかかわってきた。国内では、三番目のユダヤ学研究の学会となる。国内のユダヤ教研究者の交流の場が増えたことは、当研究を進捗させるうえで、きわめて有益であった。

3) 海外の研究機関や研究者との連携

当研究を円滑に進捗させるために、海外（特にドイツ）の研究機関を訪問し、資料を調査し、現地の研究者と専門知識の交換をおこなった。2009年には、ミュンヘンとベルリンを訪問し、18世紀末のユダヤ啓蒙主義関係の一次資料を閲覧し、現地の研究者へのイ

インタビューをおこなった。特に、ベルリン近郊の都市ポツダムにあるモーゼス・メンデルスゾーン・センターを訪問し、所長のシェーブス氏と面会することができたことは、きわめて有意義であった。

2008年には、ミュンヘンのバイエルン州立図書館とケルンのゲルマニア・ユダイカを訪問し資料を閲覧した。ゲルマニア・ユダイカはケルンの市立図書館に付属する図書室で、ドイツのユダヤ関係文献を集中的に収集していることで知られる存在である。

4. 研究成果

1) 宗教に親和的な啓蒙主義

18世紀の啓蒙主義のうちには、必ずしも宗教を敵視しない形の啓蒙主義が存在した。「世俗的啓蒙主義」のみで啓蒙主義を理解することはできない。宗教内部の改革運動としての啓蒙主義にも目を向ける必要がある。本研究では、モーゼス・メンデルスゾーンのユダヤ啓蒙主義のうちに、反啓蒙主義ではない、宗教と親和的な啓蒙主義の模範的事例を見出した。

宗教との親和性という特徴は、メンデルスゾーンの政教分離論のうちにも現れている。メンデルスゾーンは、近代国家とユダヤ教を共存可能なものとするために、政治と宗教を区別した上で両者を共存させようとした。彼の政教分離論は、宗教を否定し宗教から自由になるために、宗教の切り離しをおこなうものではなかった。

この場合、特に問題となるのはユダヤ教の律法の位置づけである。本研究では、メンデルスゾーンの律法解釈が、スピノザやカントとどの点で異なっていたのかを明らかにした。その点について以下に紹介する。

2) スピノザとメンデルスゾーン

スピノザとメンデルスゾーンの関係については、共著の『ユダヤ人と国民国家』に収録された「モーゼス・メンデルスゾーンと政教分離」や日本宗教学会の口頭発表の中で、その成果を発表した。

スピノザとメンデルスゾーンは、共にユダヤ教の伝統が近代において直面する課題を直視しながらも、異なる方向に解決の光を見出そうとした。スピノザは近代とユダヤ教の間に存在する矛盾の方を強調したが、メンデルスゾーンは両者の両立を目指そうとした。ユダヤ教の伝統と近代の啓蒙主義という二つの世界に同時に、しかも本格的な仕方でも属することができたという点で、メンデルスゾーンはきわめて稀有な存在である。

メンデルスゾーンの『エルサレム』第二部にはスピノザの名前は一度も登場しないが、明らかにスピノザの『神学政治論』を意識して執筆している個所が存在する。最初にこの点を指摘したのはユリウス・グットマンであり、アレクサンダー・アルトマンがさらに詳細に分析した。

自然宗教や形而上学の問題と律法の問題を分離し、シナイの啓示を律法のみに関係づけようとした点には、メンデルスゾーンに対するスピノザからの影響をうかがい知ることができる。しかし、メンデルスゾーンは、モーゼの律法を専ら政治的見地のみから捉えようとするスピノザの解釈には批判的であった。メンデルスゾーンの理解では、モーゼの律法のうちには永遠の真理が内包されているのであり、それは、土地や国家を超えて、個人としてのユダヤ人に関係しつづけるのである。

3) カントとメンデルスゾーン

カントとメンデルスゾーンの関係については、共著の『ユダヤ人と国民国家』に掲載された論文や、『ユダヤ・イスラエル研究』に掲載された論文「近代ユダヤ思想におけるカント主義の問題」の中で、その研究成果を発表した。

カントとメンデルスゾーンの書簡での交流が始まるのは、1761年に両者がベルリン・アカデミーの懸賞論文をめぐる競争に直後からである。カントは、メンデルスゾーンの哲学的才能と文才を高く評価しており、『純粹理性批判』の出版の際にも、いち早く意見を聞きたい人物の一人にメンデルスゾーンの名前を挙げていた。

批判期以降になると、カントは、メンデルスゾーンを、乗り越えられるべき先行世代の独断的形而上学を体現する存在として理解するようになった。カントは、魂の不死性や神の存在論証のような重要な哲学的テーマに論及する際には、メンデルスゾーンを敵役として（しかし最良の敵役として）登場させている。このように、カントは、メンデルスゾーンの形而上学についてはもはや時代遅れの産物であるという認識をもっていたが、メンデルスゾーンの宗教哲学上の主著である『エルサレム』に対しては惜しめない称賛の声をおくった。

しかし、カントが『エルサレム』において評価した場所は、理性宗教のヴィジョンや宗教がもつ強制力への批判といった点だけに限定されていた。カントは、ユダヤ教そのものについては、政治的・民族的理由のみに基づく構築物にすぎず、純粋な宗教の名に値しない存在であるという理解をもっていた。メンデルスゾーン自身は、『エルサレム』では、

一方では政教分離や強制力への批判といった近代的な宗教理解を展開したが、同時に他方では祭儀律法に象徴されるようなユダヤ教の伝統を守ろうとした。しかし、後者の主張はカントによって理解されることはなかったのである。

律法の問題について、もう少し詳しく検討しておきたい。メンデルスゾーンの『エルサレム』での根本的主張は、ユダヤ教は理性に合致する宗教であり、律法をもつからといって奴隷的隷従を強いる宗教なのではない、というものであった。ここで問題となってくるのは律法の存在意義である。メンデルスゾーンは、『エルサレム』の草稿の中では「キリスト教は精神の抑圧である」と述べていた。

普通、律法主義の宗教に対しては、人間に奴隷的な従属をせまる不自由で抑圧的な宗教であると言われることが多いわけだが、メンデルスゾーンは、キリスト教の方も精神による抑圧を生み出しているのではないかという批判を述べているのである。公刊された『エルサレム』では、第三草稿の「建物の基礎が不確実であると思うものは、彼の所属を下層階(ユダヤ教)から上層階(キリスト教)へと移動することによって救うことなどできない」という文章は残されたが、「キリスト教は、真理と精神における重圧である」の部分は消えている。

ところで、驚くべきことに、カントはメンデルスゾーンの草稿を読んだわけではないのに、メンデルスゾーンの『エルサレム』における隠された主張を推測している。カントは『宗教論』の第四編でメンデルゾーンの真意は次のようなものではなかったかと指摘した。「(中略) 外的な律法の負担が打ち捨てられても、私たちの重荷は少しも軽減されない。代わりに別の負担が、つまり聖なる歴史の信仰告白という負担が課せられるのなら、これはこれで、心ある人をいっそう過酷に押さえつけるからである」。しかし、このような指摘にもかかわらず、最終的にはカントは律法の存在意義を理解することはなかった。カントは、ユダヤ人がヨーロッパの市民社会に同化してゆくためには律法を撤廃すべきであるという考えをもっていた。カントは、啓蒙主義に典型的な反儀礼主義の思想の持ち主であったといえる。

カントはユダヤ人の市民権獲得には肯定的であったが、ユダヤ教を宗教としては理解しなかったのである。

ユダヤ知識人たちの間に存在する「ユダヤ・カント主義」の現象についても言及しておきたい。この点については、『ユダヤ・イスラエル研究』の掲載論文の中で考察した。

近代以降、多くのユダヤ知識人たちは、カント哲学の中にユダヤ教と共鳴するものを見出してきた。当のカント自身はユダヤ教には批判的であったことを思い起こすなら、ユダヤ知識人たちのカントへの関心の高さは注目に値する現象であるといえる。カントとユダヤ教の間には、共鳴しつつ反発しあうアンヴィヴァレントな関係が存在するのである。

カント自身は、他律的宗教としてのユダヤ教がもっている強権的性格を批判し、ユダヤ人が市民権を獲得するためにはユダヤ教の律法を廃棄しなければならないと主張した。しかし、カント自身のこのようなユダヤ教批判にもかかわらず、近代の多くのユダヤ知識人たちは、カント哲学の中にユダヤ教と共鳴するものを発見した。18世紀末にはベルリンやケーニヒスベルクの多くのユダヤ知識人たちがカントの批判哲学の信奉者となった。さらに19世紀後半になると、モーリツ・ラツァルスやヘルマン・コーヘンは、カント哲学を、ユダヤ教と背反するどころか、ユダヤ教の精神を表現するのに最も適した哲学として理解した。ラツァルスは、カント哲学に依拠しながら、まさにカントのユダヤ教理解とは対照的に、カント的な自律こそがユダヤ教の倫理の原則をなしていると主張した。

カント哲学は多くのユダヤ知識人にとって近代の象徴であった。カント哲学とユダヤ教の相反的な関係は、近代(啓蒙主義思想)とユダヤ教は共存可能かという問いへと直結している。近代ヨーロッパのユダヤ知識人たちは、カントやヘーゲルの哲学のうちにユダヤ教を近代世界において表現していくための何らかの手がかりを見出したが、しかし彼らはそうした哲学を単に受容しただけではなかった。そこには、キリスト教的背景を色濃くもつ近代西洋哲学を受容しながらもユダヤ教を表現できる哲学へと改変していこうとする試みがあった。

カントとユダヤ教の関係においては自律や他律が主たる問題となっていたわけだが、これはもう少し一般化すれば、道徳、法、宗教の近代における位置づけをめぐる問題であったといえる。つまり、そこでは、カント哲学の解釈を通して、ユダヤ人社会の近代への対応という問題が論じられていたのである。その意味では、カントとユダヤ教の関係をめぐるアンヴィヴァレンスとは、まさに近代ユダヤ教そのものが抱えるアンヴィヴァレンスであった。

4) ユダヤ教と近代

最後に、メンデルスゾーンの近代ユダヤ教哲学史上の位置づけを通して、ユダヤ教と近代

の関係について考えてみたい。この点については、特に『思想』に掲載された論文「シュトラウスとローゼンツヴァイク」の中で考察した。

まず、近代ユダヤ哲学について一つの見通しを与えておきたい。近代ユダヤ哲学はユダヤ教を理性の宗教として理解した。近代ユダヤ哲学の時代は、モーゼス・メンデルスゾーンからヘルマン・コーヘンまでを一つの区切りとして括ることができる。メンデルスゾーンは『エルサレム』においてユダヤ教が啓蒙主義時代の理性に合致する宗教であることを強調した。コーヘンは晩年に『ユダヤ教の源泉にもとづく理性の宗教』という書物を書き残したが、そこでは、ユダヤ教の単なる合理主義的解釈を超えて、ユダヤ教が理性の宗教であることがユダヤ教の源泉の方から明らかにされている。

近代ユダヤ哲学は、近代ユダヤ教をとりまく歴史状況の中で形成された。19世紀は、ヨーロッパ社会へのユダヤ人の同化が急速に進行した時代であった。その過程で多くのユダヤ人たちがキリスト教に改宗した。もちろんこれは、一方では、近代の一般的な傾向である宗教の地位低下によって、宗教を自らのアイデンティティの核としては考えず社会的便益を考えて改宗する人々が増えたためであった。しかし、他方では、近代のユダヤ教が次第にユダヤ人たちの信仰上の渴望に応えることができなくなっていたためでもあった。

啓蒙主義の時代にはメンデルスゾーンに代表される合理主義的なユダヤ教理解が一定の魅力をもっていた時代があったが、時代を経るにつれて、人々の魂の乾きを癒すものではなくなっていった。すでに久しい間、(ユダヤ教が形骸化し) 世俗化した社会状況においてユダヤ教を再発見することができるだけの力をもった思想が待ち望まれていたのであり、それゆえにこそ、ブーバーやローゼンツヴァイクが示したユダヤ教理解は大きな反響を呼び起こし、ユダヤ・ルネッサンスと呼ばれる20世紀前半のユダヤ思想の新展開が生まれることになったのである。もちろんそこにはブーバーやローゼンツヴァイクによる東ヨーロッパのユダヤ教との出会いがあったことを忘れてはならないだろう。

特にローゼンツヴァイクの『贖いの星』は、西ヨーロッパのユダヤ人たちによる熱狂的な反応を巻き起こした。ローゼンツヴァイクの『贖いの星』が出版された当時(1921年)、コーヘンの『理性の宗教』はいまだ不完全な形でしか公刊されていなかった(一応の完全版といえる第二版の刊行は1929年である)。それだけに一般の読者にとって、『贖いの星』は決定的に新しい何かを示す著作として受け止められたといえる。もちろん、ローゼン

ツヴァイクをはじめとする一部の人々はコーヘンの生前にすでに『理性の宗教』の草稿を読んでおり、そこからインスピレーションを得ていた。晩年のコーヘン哲学は観念論的な理性概念を超え出る内容をもっていた。その意味で、晩年のコーヘン哲学は、近代ユダヤ教の終着点であると同時に、近代ユダヤ教からの転換点でもあったといえる。そのような観点から晩年のコーヘン哲学を評価するのがローゼンツヴァイクであった。

一般には、近代とは宗教批判の上に成立した時代であると考えられている。近代の成立と宗教批判が切り離すことができないのだとすれば、近代を改めて問い直す場合は、宗教なき近代の自明性を問題にしなければならなくなる。しかし、近代を批判したのはマルクスやニーチェのような明示的な宗教批判の人々ばかりではなく、キルケゴールやローゼンツヴァイクのような宗教回帰の思想家たちもまた近代の批判者であった。レオ・シュトラウスが重視するのも、まさにこの問題であった。ここで問われているのは、近代は本当に宗教を乗り越えたのか、近代と宗教は本当に背反するのか、という問題なのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ①後藤正英、「シュトラウスとローゼンツヴァイク—20世紀ユダヤ哲学の系譜—」『思想』、依頼論文、第1014号、2008年、204-219頁。
- ②後藤正英、近代ユダヤ思想におけるカント主義の問題」、査読論文、『ユダヤ・イスラエル研究』第22号、2007年、2-11頁。

〔学会発表〕(計2件)

- ①後藤正英、Jewish Philosophy in Modern Germany and the Philosophy of Religion in Modern Japan、2009年3月17日、国際会議「アジアにおける一神教」、イスラエル・バルイラン大学
- ②後藤正英、「スピノザとメンデルスゾーン」、日本宗教学会第67回学術大会、2008年9月15日、筑波大学

〔図書〕(計1件)

- ①後藤正英、岩波書店、『ユダヤ人と国民国家』、2008年、191-213頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

日本ユダヤ学会ホームページ

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsjs/>

京都ユダヤ思想学会ホームページ

<http://www1.ocn.ne.jp/~hebraica/>

日本宗教学会ホームページ

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jars/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 正英 (GOTO MASAHIDE)

佐賀大学・文化教育学部・講師

研究者番号：60447985

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者